



想
必
著
聞
奇
佳

13
1191
2



15
1191
2

門 13
1191
卷 2

想山若圃奇集巻の目録

目録

- 一 呂門千體荒神尊靈験の事
- 一 猫のその云ふ事
- 一 海獺昇天と云ふ事
- 一 山標の事
- 一 風り削き大木自落し紀ふ事
- 一 別技舟場出た事
- 一 鎌鼬の事
- 一 馬の出魂跡と云ふ事
- 一 辨光天竺りと云ふ事
- 一 附夜遠地蔵の事

藏島
書印

此家
文庫

目録

一 藤原の髪乃毛の生うふ事
 一 神佛の靈験もく車に曳まもく怪家のりり
 事

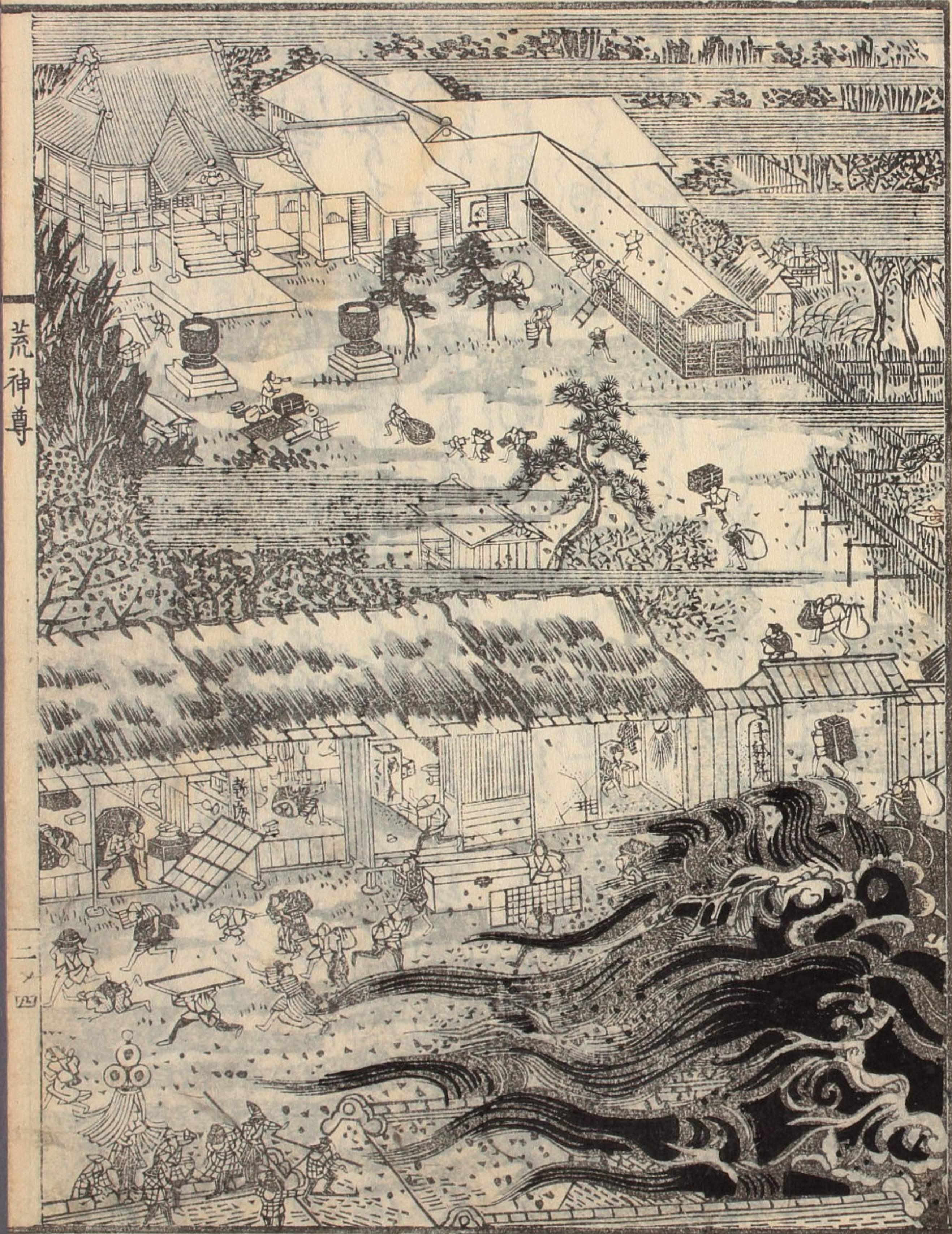
(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

品川寺神宮神言靈験の事

文化二年 丑十月廿九日南品川妙國寺門前より出火
 北風烈く觀音前乃玄藏屋金屋之軒をめぐり大衆も
 忽に焼く品川寺の連の南村田屋と云衆をば焼く跡あり
 其後文政四年己丑月十日北品川の藤田屋と云藤原屋を
 出火くは時風烈く霜月十餘町焼抜前の衆をくも
 焼くもと村田屋の北隣信濃屋と云衆を南焼跡り
 又其後三年己丑月十二日品川の古川町より出火のとれも
 北風烈く西と更り悪風砂石と荒火もあつて
 移り忽品川の觀音前を焼抜り
 此火の臺のハツ時此は出火
 品川の東の方品川町八丁目北品川町ありやけ言梅の海をめぐり衆を焼く
 所なるよ火消の町家の十八丁ありやけ言梅の海をめぐり衆を焼く
 火を多し海へ吹送且を流す方も能り一は火先ハ薩別度の中屋を焼く事

焼止りたるも風強りし故うま肉り通風協南の方赤川幸高の申能汰の御所あり
南の方(ヤ)軒廻り観音前(の)建陽宗屋全三軒屋ホと云焼止るこの二軒屋年古焼つと云
今の宗屋程たる宗屋うきうきと宗屋(の)焼止るも時焼(の)海防近頃焼止りこの
大事火元より八九里の上十餘丁程焼止り烈風故跡の外(の)焼止るもと世色(の)秋よ
の焼止る此時とまて彼村田屋(の)跡もつりか(の)焼止るも火災(の)火
多(の)焼止るも竹(の)故(の)事(の)形(の)入(の)不審(の)思(の)或時(の)存
河原(の)宗(の)須(の)の(の)海(の)り(の)け(の)村(の)田(の)屋(の)三(の)宗(の)酒(の)食(の)世(の)家(の)
の(の)焼(の)止(の)る(の)事(の)と(の)降(の)し(の)改(の)り(の)出(の)る(の)か(の)女(の)り(の)身(の)子(の)揮(の)き
と(の)志(の)氣(の)兼(の)る(の)故(の)事(の)主(の)の(の)達(の)し(の)身(の)ぬ(の)成(の)り(の)思(の)ふ(の)よ(の)ま(の)ハ
た(の)く(の)後(の)家(の)の(の)り(の)く(の)云(の)故(の)類(の)く(の)その(の)後(の)家(の)と(の)呼(の)く(の)何(の)ぞ
神(の)佛(の)の(の)く(の)も(の)伝(の)作(の)も(の)る(の)う(の)又(の)と(の)云(の)る(の)く(の)身(の)う(の)法(の)れ(の)り(の)く(の)意
多(の)を(の)或(の)と(の)實(の)物(の)靈(の)物(の)お(の)う(の)く(の)も(の)多(の)や(の)何(の)ぞ(の)は(の)家(の)の(の)焼(の)止(の)る
心(の)ぬ(の)り(の)も(の)く(の)や(の)く(の)く(の)く(の)と(の)身(の)ね(の)る(の)よ(の)金(の)毘(の)羅(の)秋(の)葉
福(の)行(の)さ(の)ま(の)る(の)類(の)と(の)神(の)社(の)と(の)佛(の)も(の)法(の)の(の)伝(の)作(の)を(の)護(の)摩

法新禱の法れも口座(の)く(の)は(の)法(の)法(の)や(の)中(の)種(の)の(の)列(の)り
心(の)ぬ(の)り(の)も(の)ゆ(の)り(の)も(の)む(の)花(の)き(の)ら(の)靈(の)物(の)靈(の)寶(の)の(の)持(の)も(の)る(の)こ
と(の)あ(の)る(の)く(の)く(の)る(の)伝(の)作(の)の(の)に(の)油(の)音(の)か(の)く(の)居(の)る(の)よ(の)は(の)後(の)家(の)を(の)
吐(の)し(の)出(の)せ(の)し(の)ふ(の)を(の)松(の)の(の)焼(の)止(の)る(の)故(の)思(の)法(の)の(の)要(の)と(の)今(の)の(の)
連(の)震(の)の(の)海(の)雲(の)寺(の)の(の)子(の)神(の)意(の)神(の)極(の)の(の)御(の)堂(の)の(の)棟(の)の(の)と(の)炭(の)乳(の)種(の)
箱(の)り(の)大(の)燃(の)居(の)り(の)は(の)是(の)ハ(の)何(の)故(の)事(の)ぞ(の)大(の)事(の)の(の)生(の)来(の)る(の)や(の)と
見(の)る(の)う(の)ち(の)り(の)忽(の)西(の)の(の)方(の)より(の)大(の)風(の)吹(の)来(の)り(の)は(の)火(の)の(の)燃(の)居(の)る
箱(の)々(の)海(の)雲(の)寺(の)の(の)門(の)の(の)方(の)へ(の)飛(の)移(の)り(の)故(の)出(の)せ(の)故(の)海(の)雲(の)寺(の)の(の)
是(の)ハ(の)隣(の)之(の)を(の)村(の)田(の)屋(の)の(の)寺(の)の(の)是(の)ハ(の)驚(の)き(の)死(の)部(の)く(の)ま(の)頂(の)ハ(の)未(の)丈
存(の)生(の)の(の)是(の)ハ(の)大(の)事(の)なり(の)と(の)い(の)は(の)く(の)後(の)丈(の)と(の)記(の)る(の)が(の)ら
私(の)を(の)藤(の)床(の)と(の)仕(の)舞(の)り(の)も(の)目(の)と(の)覚(の)り(の)竹(の)事(の)成(の)や(の)と(の)中(の)の(の)故
竹(の)事(の)所(の)め(の)く(の)い(の)今(の)荒(の)神(の)極(の)の(の)法(の)屋(の)根(の)の(の)隣(の)の(の)屋(の)根(の)



北荒神尊

二
四



南島川観音堂火災の圖
 此堂は文政元年
 同六年ある乃
 火事の時なり
 天保十二年の
 大車後、別な
 千軒差神宮
 乃堂の前より
 又一月明
 手外南島の
 物もむき八は
 備くハハハ
 櫛子取り
 居たり

真生堂
 印

伊豆の御堂もともて後醍醐天皇の大事を隣りの品川寺の
門前を焼く事ありて運能西園寺の御堂の御堂も地元の強風よ
又入強く落風ありて来り火を惹き海へ吹出さし投り
品川寺の門前を僅けの明地海に焼けて是より南へ
焼く事ありて火を引く事ありて自然に松方の焼跡の向例を貝屋
去藏の御堂も火を引く事ありて焼く事ありて火を引く事ありて
の御堂ありて火を引く事ありて焼く事ありて火を引く事ありて
品川寺の門前を僅けの明地海に焼けて是より南へ
焼く事ありて火を引く事ありて自然に松方の焼跡の向例を貝屋
去藏の御堂も火を引く事ありて焼く事ありて火を引く事ありて
の御堂ありて火を引く事ありて焼く事ありて火を引く事ありて

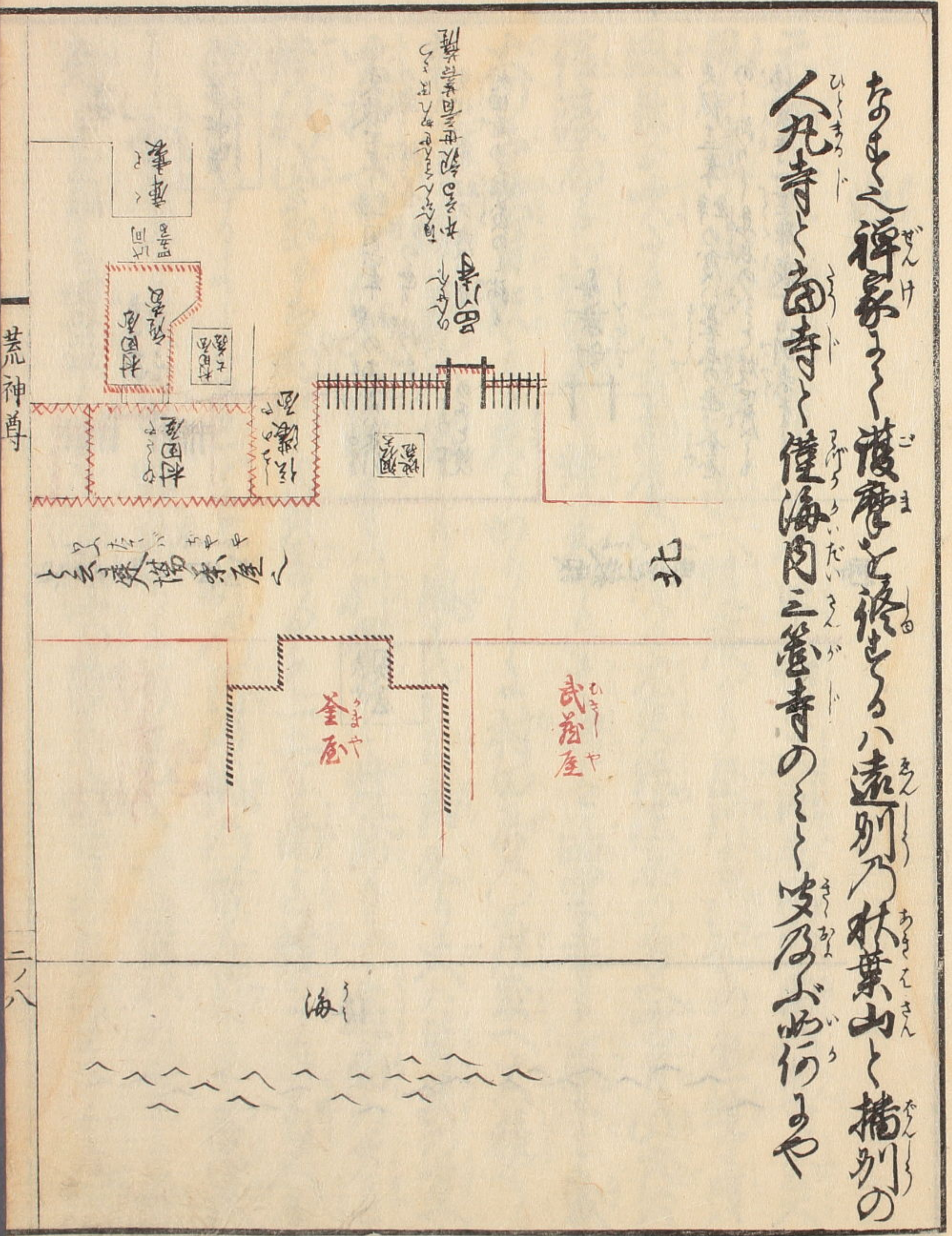
の肉も多信もたし海分伝作ははりてそと彼後家も
霊験の炳然と御堂の御堂も感伏成事ありて神佛の
霊験八月一日見え兼る事ありて新の御堂も利益と
あり居たりて知れり居る事多しを以て事ハ此の
場所と見え大事の御堂と見えハ知れり事多し何れ
精々書記してとて文面ありてハ多し御堂も御堂も御堂も
事とて場所と見え御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も
今更にも思成事ありて文面ありて御堂も御堂も御堂も御堂も
六臂と見え御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も
佛法信の御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も
滅除し御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も
眼前も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も御堂も

中へて家内の手懐神とてあきざりやと業内と申すは
折居信留を隣寺へ移りておぼろの信をゆりゆり
疎ゆるを成れりて下男を人成り居りては昔神乃靈憑ハ
つらに同て下男をりて顔さるるをさるるに何れも
能く不思成の弄場いづくともさるるに事よは度いとも
物もどと何ぞ眼をりて験のるるに見たりやと同り
は同と漸く夜に明渡る須摩裏り候と焚居さるり
婦人き人來りてに神田の何れも昔の毒の由所も
名もゆりてと志を申し護摩と預ひてくちやゆ
この遠方と何れ成祈願のゆりひく今頃あつて
ふやく同は恙神さるる不思成の靈験とみく昨秋大の
災難とゆき事のもつてまゝ未だを流りたる

と申す事よ付く用のもろとば私まの法授り
氣りたりと申すも松の靈験とあつてくちやゆ
同り昨夜家内皆々森静りて後要席もあつて是所
方めり何れもまゝに相寄居えは音りて申す松を
目と見り考りてと女子あひあひせむとては
秘を若や造城とて思ひ入るるに候て見たり
ゆゑ電の例の板板もえ括り脱り出たよ及んと掛り
ゆゑ驚天う一早お消く事故ありお涙の中は是ハ部と
時り大消盡(大)と入るる蓋とて事と志を成候
火消りて消盡素焼るるに壺報り板板(大)候りて板の
次第と成るるに候り音のせりと考りて柵
上よ家の並せりて子神恙神の厨子乃自ら下へ

落むひつる者ありて又が藤原の作りのつらえ響く目と
 質へのあかみ減りる難と事よのこゝろ感懐と流しけれ
 系りやゆき音人平再びは音持と又への最早も余の
 靈験と支振るま切りて思も少ううもて流し感伏
 たりたり流し新願と事なり利益と事なり事なり
 のことおひき縁と子祥意祥事なりありての流し
 子祥雙眼りおきまての所度り油願國成も云事なり
 ありて又より事故もや又前よりハ護摩の所と事
 なる祥教も事なりひびりゆきもや皆分身の利益と事なり
 こと近年竹葉流中なり事なり信作と事なり事なり
 ことと事思の靈像もことかりて事なり地
 此寺の祥意もことと天台免作の護摩と終り新願とも

ちよと之祥家とて護摩と終りハ遠別乃林葉山と播別の
 人丸寺と南寺と僅海内之管寺の事なり支なり事なり



荒神尊

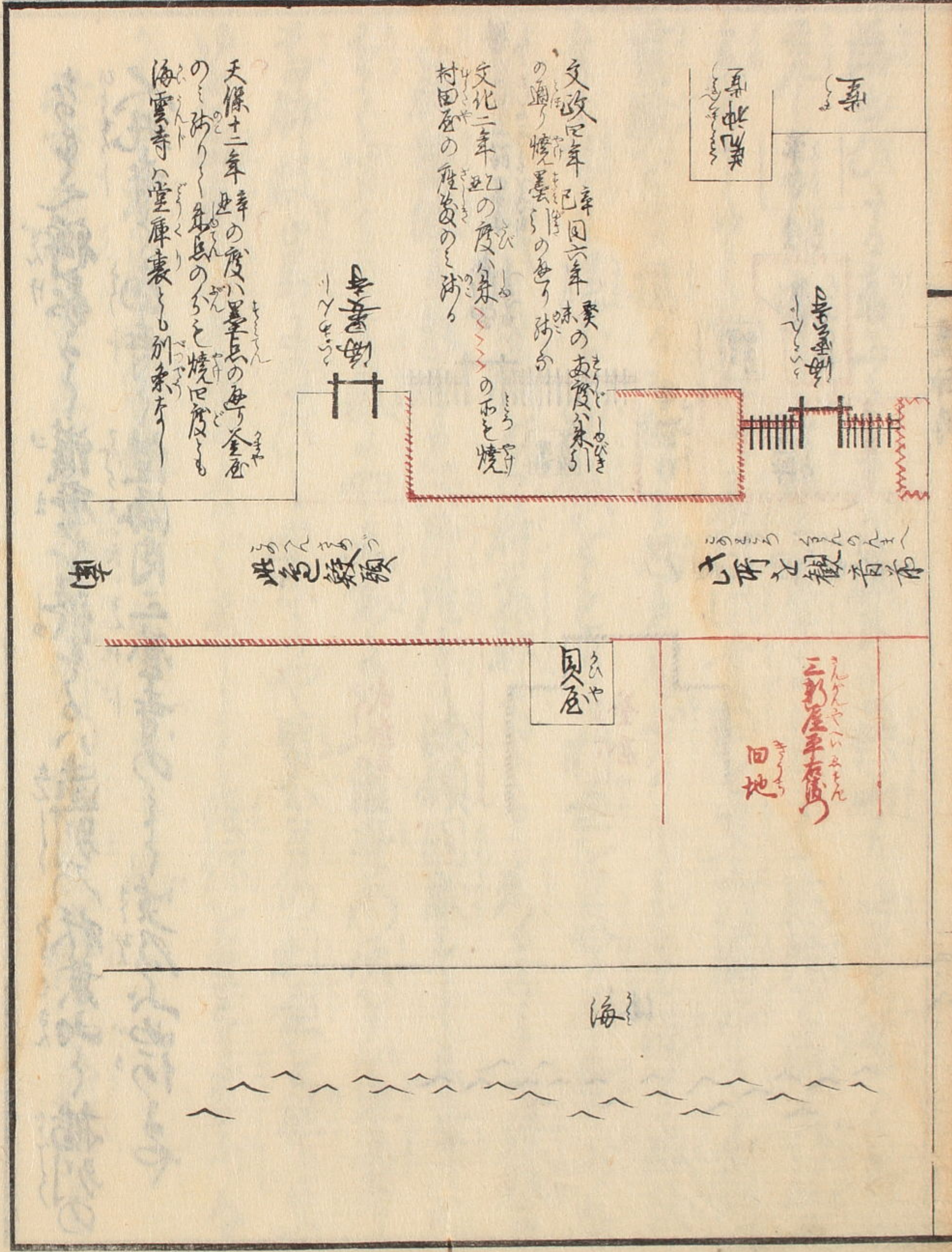
二ノ八

追加

天保十二年辛酉正月八日の早朝より又同屋場の南の角より炎
 風を強く忽ち四丁南へ焼廣がり島川古門前の色焼の町に
 風良の吹くまじり武蔵屋敷の焼る火炎は法蓮の方へ吹付は所は
 信濃屋敷を村田屋敷も焼突つり一時時を海雲寺と風下と成
 火の子吹付既り危うなり又村田屋敷の屋敷へ火は皆焚の方へ
 来る頃俄に乾の方より風をげお落来り火は皆焚の方へ
 吹拂ふやど又海雲寺の茶室へ焼付り遠南の方へ
 焼付は所より向例と貝屋敷を二丁南と焼つりをも
 防ぎてありしやちとせし所の内の風の勢り自らも急成
 り茶室のまじり焼付りしりも寺後林のまじりも
 知と南も火度と強く吹落り寺の自焼りて焼

荒神尊

二九九



肉よしと猫とけ火爐のよしは付ひ一とかの猫が曰今夜納骨町
踊りつと行んとある色はは須ハ恒持の屋を多くと物と
まらまらし事成難しと此の物もバも武をうせを云はまも
恒持の屋のよしをいふと叶りて送るみり本のゆくは猫
うをりとの事有令し同日の話あり又回書は猫寺の扱も
徳水院より猫梁のよしと一氣と通し一丸をいり梁の下落
南に之を大戸して云うりて云を同日の候より一羽うらえ
とも花の候ハ服市的事也と一羽も同日の肉度廣庭より
吹くまると記ぬ又猫の一言とらると事天中記は北曼
映言と云く云左軍容使嚴遵美閻官中仁人也嘗一日發狂
手足舞蹈傍有一猫一犬猫忽謂犬曰軍容改常顛發也犬
曰莫管他彼他俄而舞定自驚自笑と云是亦と云と云べし

見高の並まき記一添重ぬ猫の言まはハ耳震く云陸軍より
ハ成程たを者愈とまると思ふまき又其後家一物とぬ
前のまはハ猫と十年程烟をうら猫の事あるは怪むは
まはハ事や耳震く向寛政七年の春牛山伏町の何と
いゆる寺院秘蔵一猫と何いゆる庭より一鳩の心能
持ぶと秘しゆる松子ゆゑ和尙存と無鳩と追跡しゆるに猫
強念地と物とと和尙大は警右猫勝日の方へ迎と押へ
小柄と持汝高類と物とと事奇怪と極之全化けりて
人ともまきぶらめなん一旦人語とたもと人ハ高並に高下
着いよるとゆるおのハ我教を戒と破りて海と教んと憤り
く色ハ彼猫のやるとハ猫の物と事おきよは湯とど十年
餘ること生れハおとわらわらとまの十四五年と色りて

中山

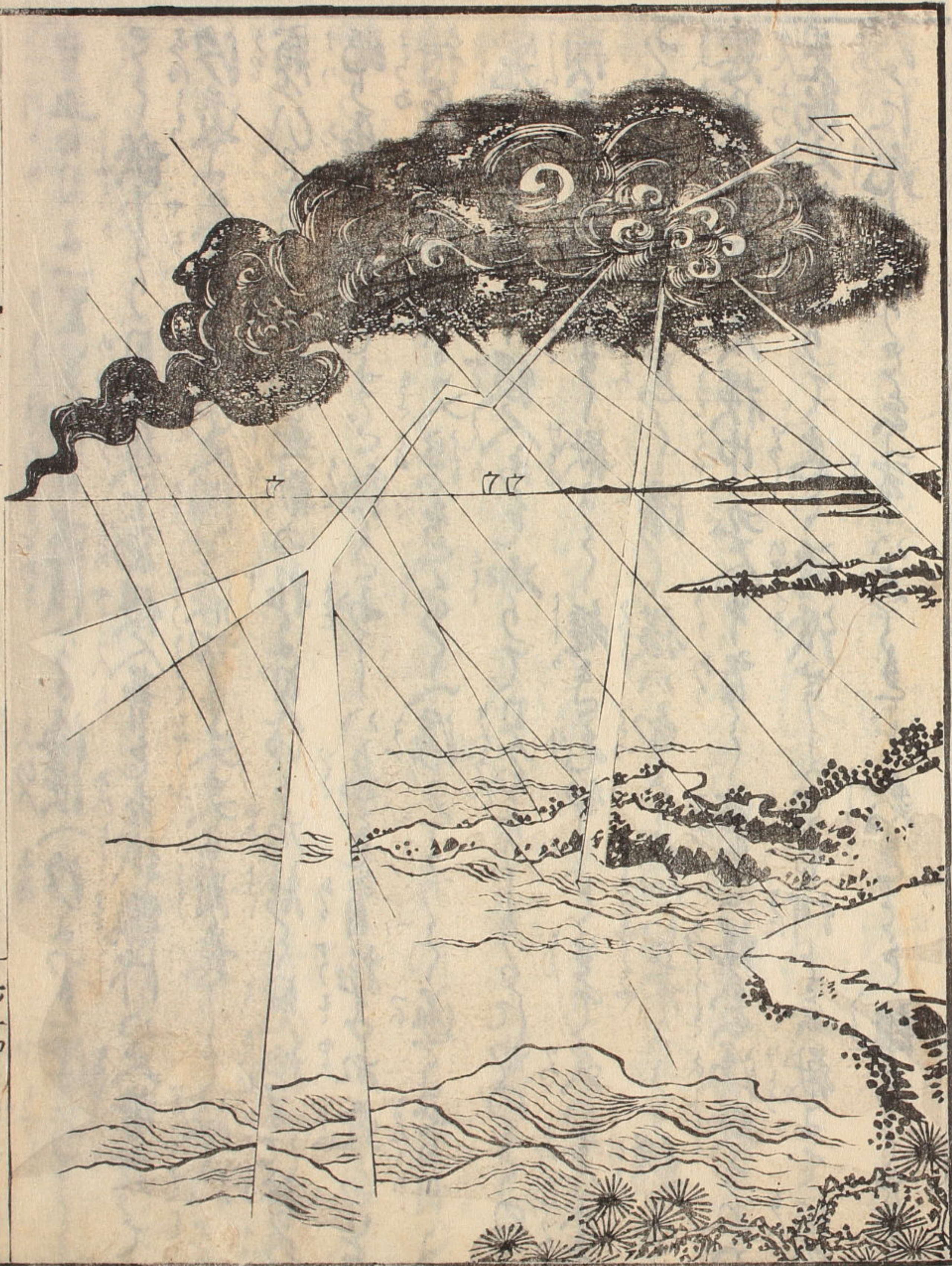


神皇と得り奉る之保右氏年数むご命と保右氏
 中々も急脚ハ汝木乃物云と有りぬきと未拾年の齡より
 いと尋問ハ物と変りし事ハ猫ハ其年切りしと物云
 事ハそぞ昔なる故物ハ今日物云と御よ笑る者あり
 我夢も何事なるハ何若ハ人走速の無り其をば
 和尚ハ其れ和尙一對ハ三拜となりて出立ハ其後ハ
 ち之部ハ見えざりしと彼宿券に恒なる人の語り傳へ
 海嶺界天をりしを亦ある事
 豊後の國佐伯侯の藩士間某 七序右後と云て御用人 砲術と好て
 江戸表天術の所家演習某の門人也天保五年 甲九月一天
 う晴波りし秋夜と格別故山嶺とせんとして回僚一友
 輩とそそに六女玉の鉄砲と携へ佐伯の城下ハを置其社

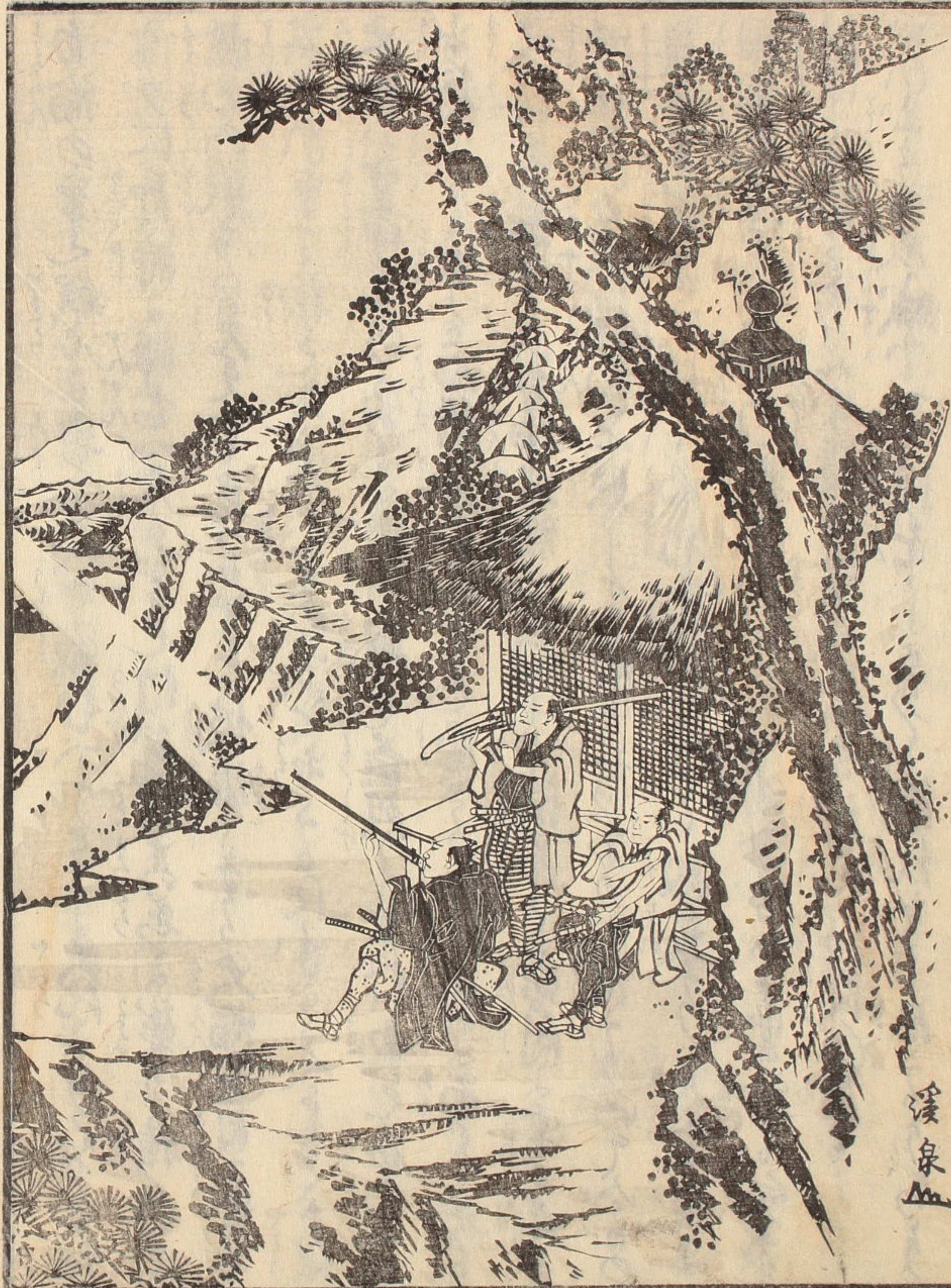
あり 海岸に降きたる雲止山と云ふ入る遊びたる物なり
海上俄に黒雲をまじり 須臾海面を掩ひ霧り舟は烈風
吹發り海水と卷とげ舟を死に 暴雨東袖と流し山海
一度の鳴動も物凄む事しんまき 遊士も稱と止め
側より十羅刹女の堂に入りて雨と避け海とと航るに何ん
初む海中よりと雲よりうつと昇天する有らぬまき 雲間より
火焔ひらめきま一文字のあまのまき 鳴り来る有らぬまき
ゆき奇煙たかりは時同僚のまよハ野のまき 八ヶ岳の海より
まよまきまきまき 年経るる海嶺のなまき 業といハ中傳まき
誰を艦成事と知たら者なりまき 如行成天魔のまき
新煙爰おのは方と名乗るると見物して居ハ臆うらに
似く武士たる者のおまき 必お九層のまき 回音てまき

勿論の事と我おは樂いなりお成むべし 夫比のまき
うらに舟時と眼赤くまき 何ん雲まき 襲り横ひく
怪物の形なり見えまき 彼焔する火焔と目面にて
其るひまき 丁種とあまの火焔の方とおつらにまき
火焔の雲中よりめまき 風を益烈にまき 舟を死にまき
赤旗しる事と心得るまき 心まき 面なるにまき 面を止まき
又海を静まり勿論火焔のまき 消るる雷附の雲もまき
吹拂ひ夕陽海面と照して時と七ツりて成るりて今日
奥も毛逆成建皆く海をなたりと相まき 舟の音目
回國北浦と云ふ所の橋所代官所へ舟へまき 八十里程も向る
沖中より何とまき 舟の難とまき 舟の海敷浮漂の居るまき
舟の出る放城下へまき 浪をまき 風流たり居るまき

海嶺昇天



二ノ十四



溪泉

中へ割強なるこゝ又おろし切刺奉と成兼うりまぬの回乃
肉ハ尋常ノ大魚の如きものゝ又おとひく最々切刺
まの肉筋と肉との間へ又おと入へ切離しまの肉筋と
上へ引揚はるり肉と筋と切離して先右筋と別れま
より肉と切刺するり脊骨の外より小骨もろりておく
のこちり 脊骨もろりハ細く筋ハ 骨筋も尋常の魚の如りの
白ふろしき魚の如き赤ふろしき魚の如き肉を
背筋の筋の如き一皮食ハ子孫もろりて骨の筋の
事なるゝゝ遠近群集ゝ食味練り似くまのり
多々悉く能くそゝありとて風味練り似くまのり
味ハ美なりて骨も甚く多々まのりて骨筋も
食らゝものゝ一皮中皆回成ハるゝ集り毛がまあり

酒教指と看たりと也おろし切刺丸る皮と泥障となりて又
若候一献ハ二と固老ハ贈り中二と江府ハ持来り
師家淡州成ハ種ハ毛餘もてて泥障ハ八筋とあり
回條もよふち無へたりと予右淡州成ハ種りたる皮と
厚く取らるゝ一筋も取らるゝハあまも毛丸く其厚も二下種も
育く今ハ牛の皮の如く毛の長さも短く種も六下種
〜〜〜入へる馬の毛ハ似て毛もまのりハ面を割く
又ハ曇色と佩たふ白紫文の両多々その中ハ厚白の斑
又薄ソろの斑たふもカクハ斤泥障ハ背通り多々も
〜〜〜まのり紫文と佩する黒文も〜〜〜つまを
根色と佩る板の光澤有る老熟の毛文とるえり種ハ
大き何程有るや令く練骨の如く〜〜〜強んが

さつしと云り

周より云奥羽平泉の昔奥羽二羽の太守孫守府將軍秀衡
又祖之代后任の地より秀衡清衡六中尊寺建立の時分
基衡と佛法より傳依し佛土運慶とて丈六の薬師如来
及び十二神位其他佛像若干と造りしゆ今て運慶より
使者と巻く贈りおきて其品

- 一金 百支 一警将 百尾
 - 一七回中経之水豹皮 六十枚
 - 一安達指 千匹 一希婦細布 式子端
 - 一糠部駿馬 千匹 一白布 三子端
 - 一信支文字摺 千端
- 形此外は奥羽の産物珍奇と云く云掃運慶より贈り

よの事南略が康遊記に見くは水豹の基衡の所を

より記すあるものも其頃奥羽の海は新のときこの
大水豹の居りしや今もくはるるに振夷地の
渡来のみよや振夷は水豹海獺とて澤山は居る
この事ハ述く及びたり物とて比の如く七回云
及びる大水豹の今もくはるる事よや渡来し
物其基衡の六十枚得し事よ今も所よ是てハ
澤山は居る事よるる水豹と海獺とハ別おる大群
種類ハ目事の振り及びる

山獺の事

深山よ山男と云その事ハ人たりと云此ハ所て云傳る
事よるる事の記しる書を彼是とて其種類を

いづくともまきや又ハ債一取人まき山と巡り歩け奉り
量り難一山魁本客もど云と同種ゆや竹のまき山源の
大いなる人粹とまき山と巡り歩け奉り我 國君の
御領本曾の山奥へ入居る本客の下の役あどいその
足跡を折し人の奉りまき山と巡り歩け奉り巨人の足跡
とまき山のまき山 有其人ハ大足跡其訓字とまき山 漢去も大なる足跡
大足跡の奉りまき山の 平竹馬の友石川竹某先年本客方まき
まき山と巡り歩け奉り 深山へ入居る時山男の榮結とまき山の
折あかすと二夜見入りまき山のまき山と巡り歩け奉り
おろくゆまき山と巡り歩け奉り今まき山と巡り歩け奉り人まき山と巡り歩け奉り
まき山と巡り歩け奉り 思捨奉り 一残念との奉りまき山と巡り歩け奉り
佛足 長きとまき山と巡り歩け奉り 堂一りまき山と巡り歩け奉り

よりえまき山と巡り歩け奉りまき山と巡り歩け奉りまき山と巡り歩け奉り
まき山と巡り歩け奉りまき山と巡り歩け奉りまき山と巡り歩け奉り
其頃 文化の本よりまき山と巡り歩け奉り 本曾山の月玉龍山 御嶽山のまき山と巡り歩け奉り
濁川と巡り歩け奉りまき山と巡り歩け奉り 山男と巡り歩け奉り 奉り
まき山と巡り歩け奉り 文ハ玉龍村松人金兵衛とまき山と巡り歩け奉り 奉り
我慢を強一 大膽者まき山と巡り歩け奉り 常一 他の松人よりハ朝色早く
物ふ奉りまき山と巡り歩け奉り 明六時比ハ松道具と脊負て本曾
りまき山と巡り歩け奉り 只まき山と巡り歩け奉り 元小屋より出 元小屋ハ本と伐路深山ハ小屋と
深山ハ本曾中りまき山と巡り歩け奉り 後の方まき山と巡り歩け奉り 大行まき山と巡り歩け奉り
音響まき山と巡り歩け奉り 故振ぬりまき山と巡り歩け奉り 陰響のまき山と巡り歩け奉り 姿のまき山と巡り歩け奉り
まき山と巡り歩け奉り 道返まき山と巡り歩け奉り 一谷向いの谷へ入りて 漸
氣を返すまき山と巡り歩け奉り 跡返らまき山と巡り歩け奉り 杖のまき山と巡り歩け奉り 杖の中

目白く大き通例
 の茶碗のどり籠を
 垂る根の足面膝ハ
 落赤く見え身
 無神ハ黒く見える



是ハ藤行と
 云々行なり
 一両り
 別々
 奥深き山
 少く先年
 あり芥子
 二重竹の
 丈ハ八九尺
 種つより
 一丈位の者
 あり

毎日本夜の場合へは...
 顔の...
 不審...
 海...
 見...
 山男の事ハ諸書...
 北城雪澤...
 弁侯...
 雪澤...
 能似...
 山男

山男ハ又別様ト見せり深山の奇蹟と云ふ事
水

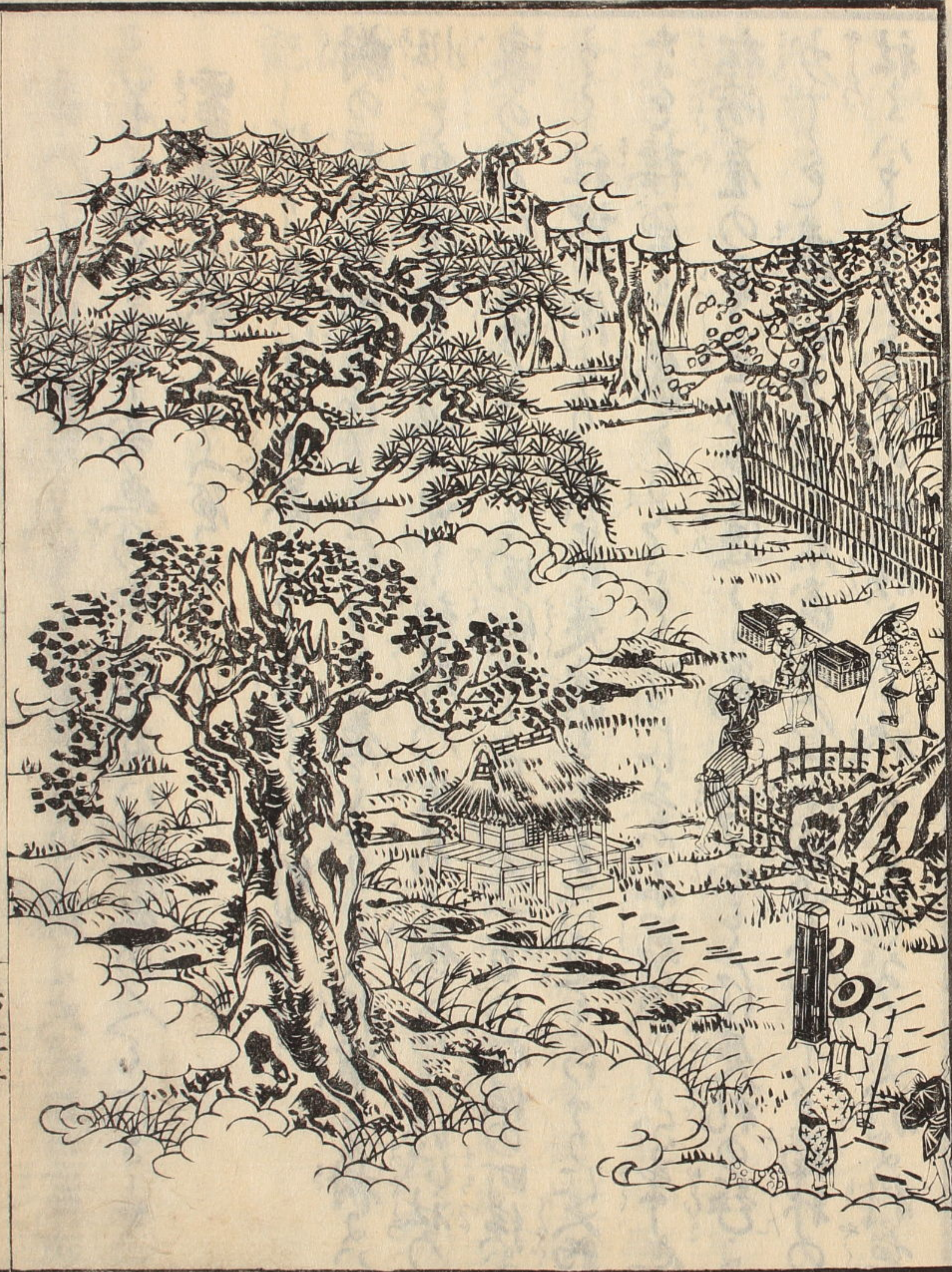
風に倒さる大木自然と起る事

伊勢の國松坂の入口たり例は松崎庵と云建場兼庵あり
其兼庵の側より細路と七八十歩入るあり又同四面徑の
社地り小祠有去人福祿の社と云は祠の例は標の樹一株
有り此樹天保八年酉八月十日の大風は
諸國大風外は尾羽
根と云ふと云隣りの氏家へ倒れ起りて家をか
傾せり里人集りて評議せり云は樹ハ社本と云傳へ
るる本のみはは修りもおとすまう人足と集りて元の如く
祀るのハなるまうと云ふと云は樹ハ一夜の中
自然と元の如く起垂りたるハ海へ不思議成事と

人足との云ふ事この社のありの如くに方五六間の社地
あり何と云ふ古の法度もや又園中徑の楠の本の梢ハ
枯然りて枝葉の繁くさか大木一株と云園徑の松一株
件の標と云標の如く余ハゆき難樹もなかに生さ
ざるの如くお濃く茂るも中よふと云は
る祠有る祠は向ひ右の方には標の樹有る竹と云
は連と云は傍に建れ有る文に云
此大福殿と云は大國皇命事代主命濟二柱の
御社と云は標と云は今年天保八年八月十日の如
風雨甚しくこの社本風面のため根がゆるり事と
をしまぬいありにま夜成の如くは
隣の人へ何事せん社の色と云ふはは標

倒木

二二二



は舟の中は深きものへ書きつる文字のきこも悉く
 磨滅しつゝ見えずとも
 彼寺の門前の救済
 きんがしきから読
 閣をりしハ抄り多
 諸は舟の事とて今
 博識家とて舟の事
 成る二三の今案とて今
 有とて點類成案の事
 たり何れもせよ形
 中六尺をり長十二間
 續きあふ楠の木今



予と見えに舟
 あり中深の文
 舟の事ゆきとて

せりハ一舟合もきりとも
 一團り一楸二楸とて
 思ゆる者ハ一楸の木少
 新のこもて割扱
 舟を救艘者ふらそのや
 又ハ昔とて舟の舟ハ一楸
 一二艘ハハ一楸の舟ハ一楸
 古風なる舟ハ一楸の昔
 舟ハ一楸の舟ハ一楸
 推素なる舟ハ一楸の舟
 舟ハ一楸の舟ハ一楸



下さるる事なりとの事なり今ハ
 如何なり〜元來は舟の
 船先の前年來水中より
 出居る事ども寺の教法
 船先もさちども誰ぞも
 見知り者なりなりお色
 事なりを呉く事考ふ程
 不審なる舟の良書記
 ね〜後昆の良説を
 待つ〜

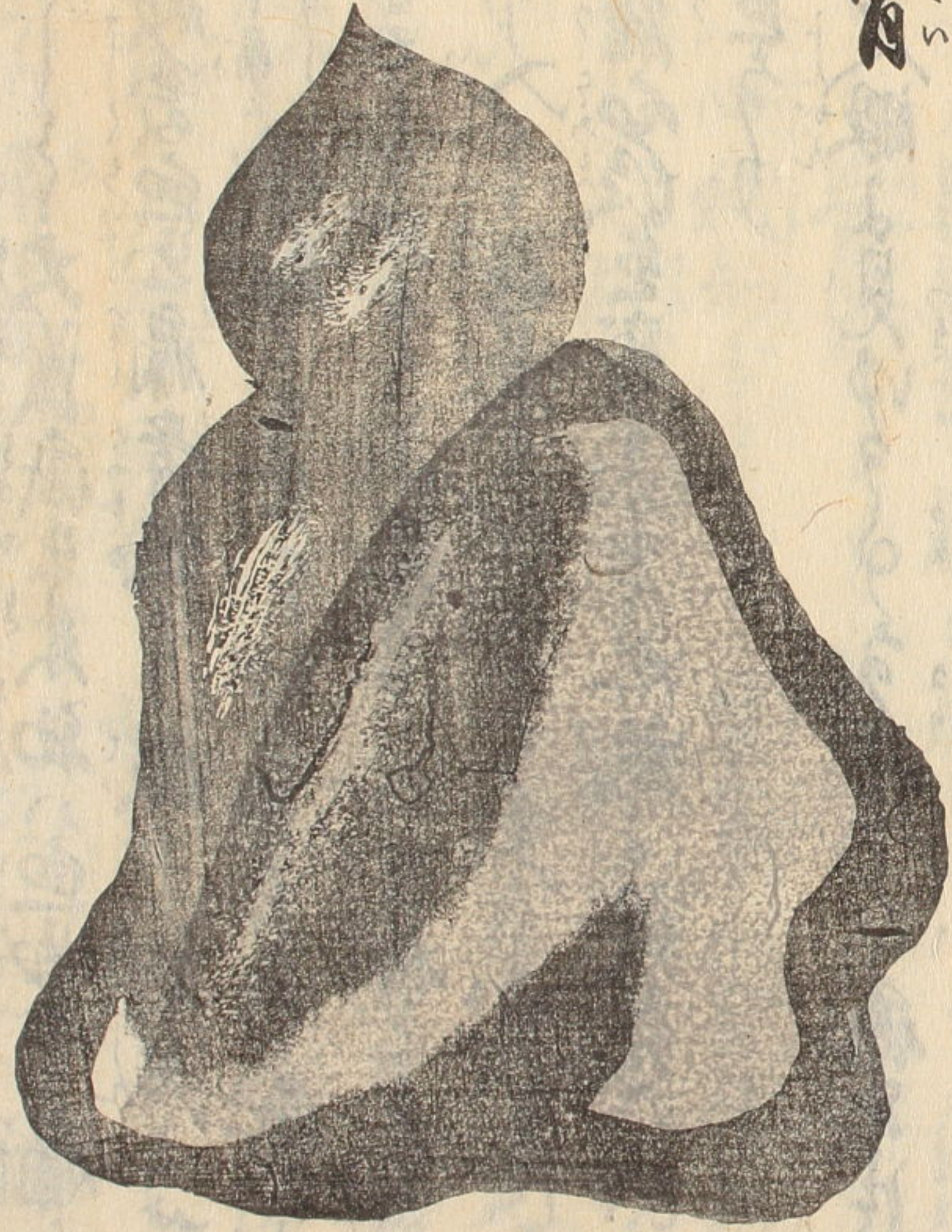


舟の形も本目大目世當の
 通りも〜少〜とお遠は
 舟の上端田は〜より二尺程
 去中へ埋り居船先の〜ハ
 数年来水中へ出居る事
 ども教法の所放不審と
 なる者なり〜お色〜を
 舟先長さ十一間式尺程中の
 浮り居る事〜五尺式寸
 ほどありお船先と艦の



舟ハ大群同ノ中ニ也故乃
 本の厚さ三寸深さ八寸
 七八寸ノ一尺をり中の方へ
 縁迄有る舟底の方へ
 一尺餘を有る舟底の方へ
 舟底の方へ





省

舟に刺拔

向

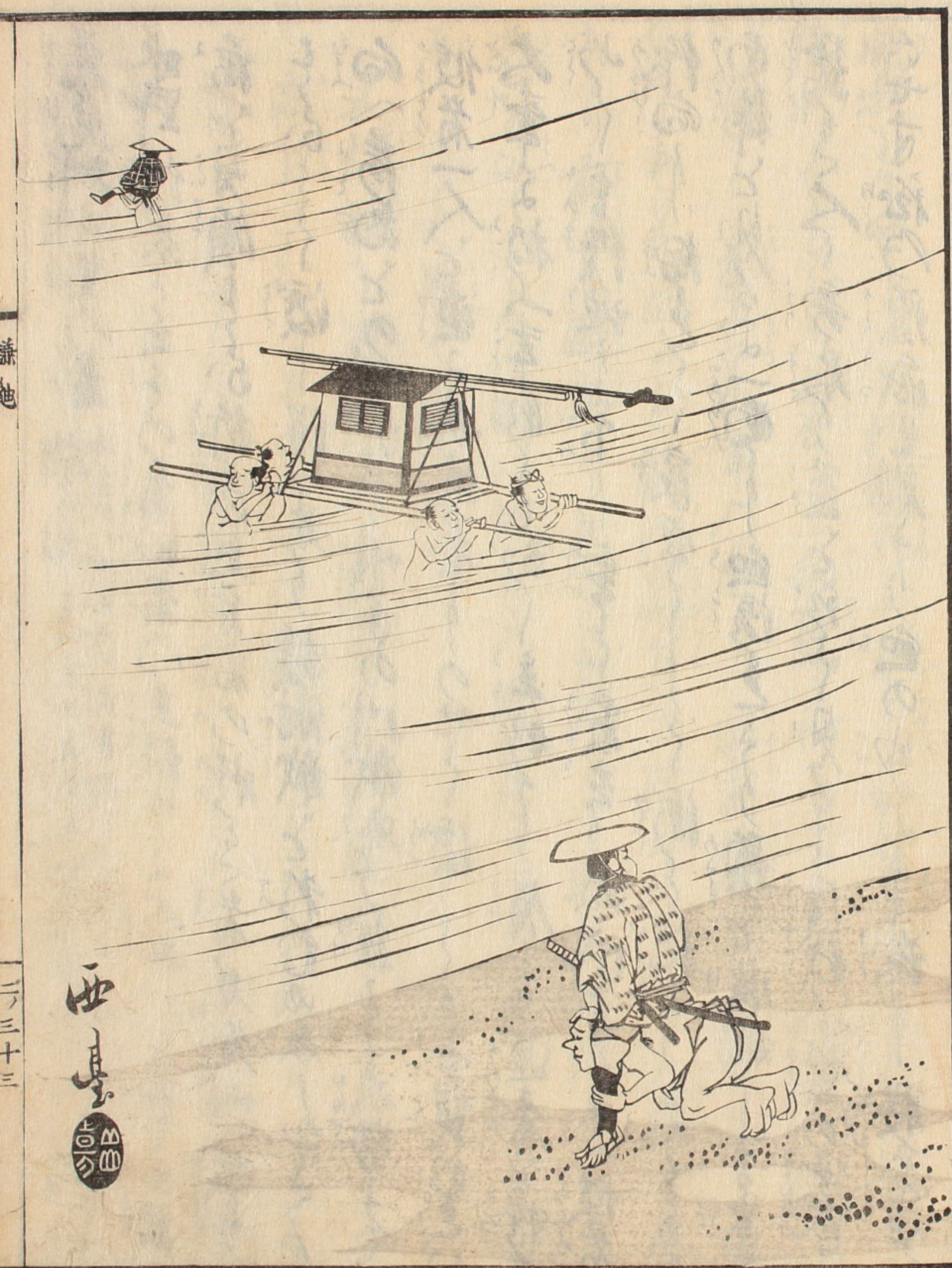


長七寸

中傳へむ名古をよむハ後々々及りて宮と唱海の同
笠寺色よくくもあまもく死よりと云とせりりこまは
天白川あぐ云山門の末を河りは先唱海の東橋校同を
り色ハ如何よも居そふ成地灯々清々山よも多
展ふ之 本曾山あぐハ如何よも是未の幸に志深く成後之核りて世の探案せむ
近時ハ木曾山中ニモアリ 名古をよむと云平張る所よりハ出ハるき
幸なり諸國の人よ尋くも多ハ心なり知ぬ人多し予
文政六年野別大森村 日光の三里傍 遊遊尚せ時地ハ豫龍
多き大地ありん尋り澤山よも好り人をも村中
あぐハ年々一人ハ入らるるくも不審ゆせむ
此大森村ハよりハ八十村餘の小村なり此地ハ日光山の山麓に在りてはもと小森屋の麓
ありて山ノそとに日光山の栗栗山と云ふ出大河有信川の之之又ありてこのかよりハ
日光山より遠く大谷川ありて山川よも
按てより所なり又故澤山より大地あり 支のり油路ハ宇都宮よ寄ぬ

此地ハ山を如 旅宿の至末出 豫龍の幸と怒
多く平原の野地なり 尋りに左板の後ハ一向存せむと云予日光色うくハ
もとの僅十里の遠ハあり及りてや同ハ成種
日光色うくハ左板の幸と背板り成りて
りん 虚實一向存せむと云予日光色うくハ
是皆天地争後の後 ひとり人智と又はのめ
我耳目ハ見事な本ハ初ぬ人多きと云況幽明と世
一貫の理ハ多岐をぬ人の多きと云理地大森村の幸ハ
は後ハ世界中ハ常々有本と云地居不思議と云
不思議と云と宇都宮のそハ右板の怪ハ世界よ
こも思ひ居く怪事と云と云 却く怪くせむ井中
の怪の怪漢実ようハ成り

西
長
四



車あり〜西成所ま〜西より又浦り水き〜故子供
 集り水中と浮り〜栲の居る〜丹羽一徳
 と云そのいま〜知り〜十歳計りの右浦り水の申と
 は豫よりけらき〜又予が知る人松井又市と云
（り）麻布太川の栲十八歳の時妙と云〜近色の川を
 渡り水中〜其の裏より甲と云け〜想らき〜が
 遂〜は栲が基と成〜男より〜
 豫龍〜無らき〜世ハ救十人〜は栲〜死
 将〜ある人の〜栲ハ大〜と云〜ハ死ぬ〜
 又は怪お栲と〜と云〜の〜頃江谷口若紋栲
 の裏店ノ者の妻家の内巻の〜は栲生来久〜

難儀せ〜と云〜又曰谷乃天王横河よ〜ハ
 婦人便所〜と云〜又曰谷乃天王横河よ〜ハ
 又中込板町先子組〜と云〜
 うちと足と出〜と云〜極の下の方〜
 かけら〜と云〜
 凡は類の怪と遊〜と云〜又曰谷の靈符た〜切強新〜
 九字十字漢字法〜と云〜
 有〜と云〜眼赤〜と云〜又思波成怪お也
 又伽婢子漢篇に同〜刻の同は豫龍〜怪お奉侍
 旋風吹真〜と云〜
 口ひ〜と云〜痛〜と云〜又血ハ〜と云〜

詳ナラズ

一名射工蟲

抱朴子

沙蟲

事物異名

沙虎

新語

溪弩

同上

溪毒

通推便覽

蜮魚

南寧府志

石鏡

新語

越後高田海邊ニテ

行人曲阿ノ處

ヲ過ルニ

忽チ

砂高ク

吹

上リテ

下ヨリ

氣出ルガ

如ク

覺ユレバ

ツノ人

コレニ

射ラ

レテ

卒倒シ

省ザル

丁傷寒ノ

如シ

然レ

氏

ミナ

服藥

メ治ス

病人ノ身ニ

必偃

月形

ノ傷

アリ

故ニ

カマ

キリ

ムシ

ト云

或ハ

アカム

シ

ト云

或ハ

スナイ

タト

云フ

然

レ

凡ソ

ノ蟲

ノ形

狀ハ

詳ナラズ

從來

言傳

フル

越後七奇中

ノカ

マイ

イ

タ

チ

モ

皆

同事

ナリ

此事

越州ニ

限

ラズ

他國

ニ

モ

アリ

是皆

溪鬼

蟲ノ屬

ナリ

正字

通ニ

葛洪

所謂

溪毒

似射

工

而

無物者

即蜮類也

ト云

ヘリ

廣大和幸草

狛狹和名

カマイ

イ

タ

チ

廣州

方物

記云

狛狹

因風騰躍甚捷

越巖過樹

如鳥飛

空中

又張

鍊網

得之

見又

則如

羞而叩頭

乞憐之態

又搥

擊之

倏然

死矣

以口

向風

須臾

復活

惟

碎其骨

破其腦

不死

一云

刀斫

不入

火焚

不焦

打之

如皮

囊雖鍊

擊其頭

破得風

起惟

石菖蒲

塞其鼻

即死

再不

活嶺

南人

呼曰

風狸

即此

獸也

と見る

は

事

ハ

事

會

思入

風狸

ハ

狀

チ

ヲ

獸

ト

見

テ

云

思

入

風

狸

ハ

狀

チ

ヲ

見

テ

思

入

風

狸

ハ

狀

チ

ヲ

見

テ

思

入

風

狸

ハ

狀

チ

ヲ

見

テ

思

入

風

狸

ハ

狀

チ

ヲ

見

テ

思

入

風

狸

ハ

狀

チ

ヲ

見

ナリ又舊曆ヲ黒焼ニメ付ルモ佳ナリ早ク治セザレバ癩疾
ノ如クニ爛レルナリと云々石葛蒲と古曆の黒焼
薬と見ゆ

又康熙字典より水經注永昌郡北山水傍瘴氣殊惡氣中
有物不見其形其作有聲中木則折中又則害名曰鬼彈と見え
るなりは鬼彈の形若日本の藻鼈に似たり参考の爲よ
抄出せりと

藻鼈ハ賊後七不思張の一として北越并淡東遊記を
よも志るは是れを密の右國とて古曆と
黒焼の用を事とて數日の間を念
也賊後七不思張の用を事とて志るなり
又欣膳摘要に藻鼈の底より大根の根の根をけとけり

~~~~~

武藏の國在原郡小津村叡嚴寺可雲上人の書と圓  
~~~~~曰下男熊鹿ハ生國賊後の國長谷の若  
七日庭前乃代の藻と并せり極く藻と死へ
潜り入根引よせん連池に入り忽ち右の足の向へ
臍と三寸許横りしと云々時血を生じ痛
もろく小兒の口河と云々底故葉と賊後志
藻鼈と知し驚とせぬ又死入る藻と并せり毎
水よりより一時血を生じ痛と甚く成る由
~~~~~外の用無枝一居し七月十日は其底に  
~~~~~大も癒り今予眼前には事と云々  
~~~~~の流るる張らざる事と能く





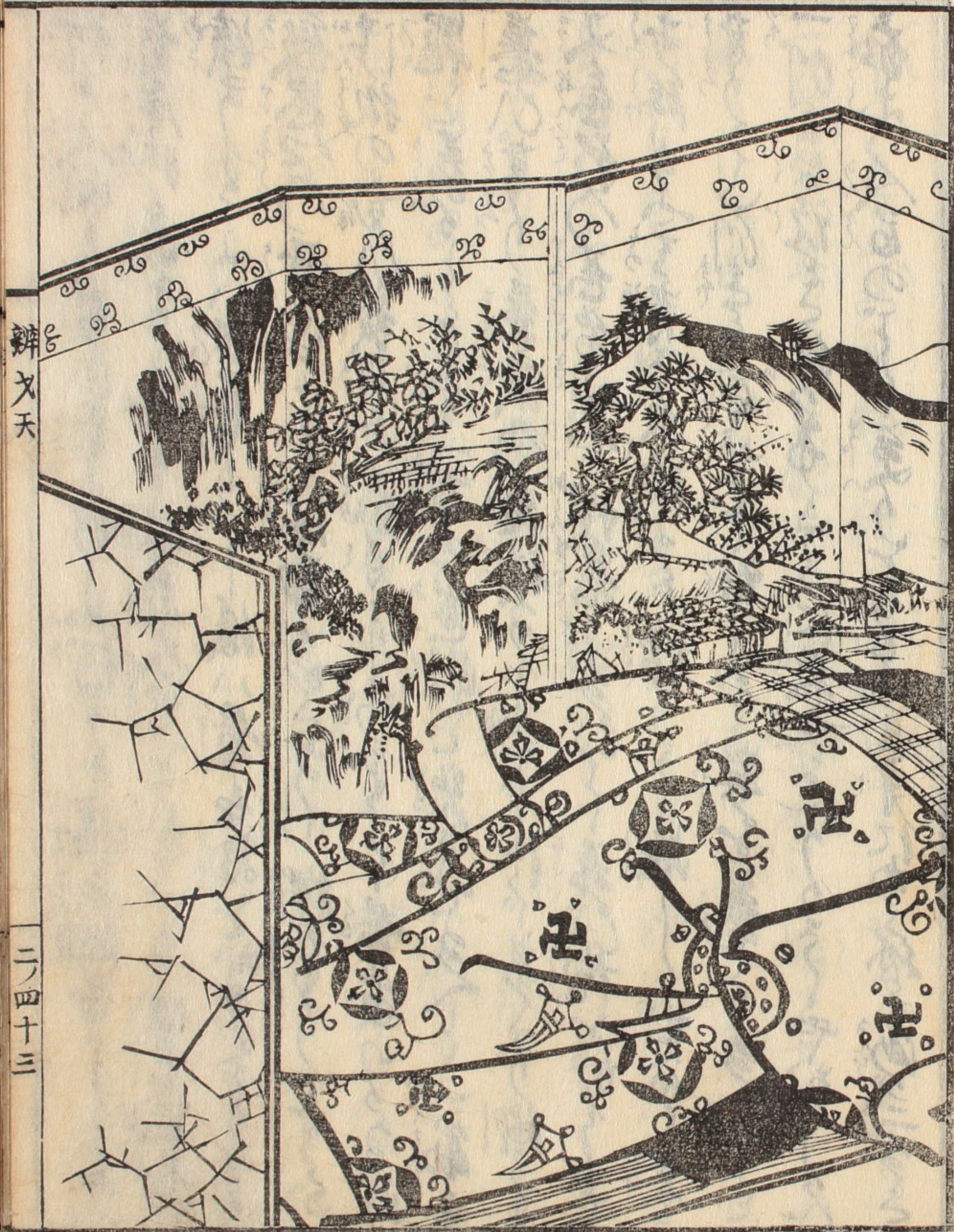


霊魂をさる事とて一怒一遂一息が病根と成る  
 此馬士とるを死に候へば若ハ馬の霊と  
 馬士の霊と合し一魂と魂魄と止めあはし何れも  
 せよ名僧智識の引導をたすまふのうらたを忽ち  
 得脱し一鬼ハ散滅さるるを残り多き事と  
 切りあたり昔居去り幽明の鬼とて見る魂とて  
 遠く事柄一或人誓の死ると掘り埋むるの魂と  
 隘狭さるるもよみ存考と不審とあはし掘りハ  
 霊魂の唯誓一魂のそと居たりとて一誓しとて  
 鬼ハ幽霊の事有るもの事西陽雜俎よるに  
 是と心く見る時は馬とかの魂の心をめハ馬の  
 鬼の跡り居るハ境入り懸てふ事ハ馬の斃る

文政四年己卯の事と我ハ予ガ方の下男回別志津村  
 吉松が自刃し其地一馬を牽歩し其事と能知居て  
 具に傳りし事柄  
 辨カ天賜りし時一ノ事  
 附夜遠地夜ノ事  
 元田沼家の藩中一々其後法眼と一何某を世人者  
 一海江の馬辨カ天と格別し信作の或年かの馬  
 一氣籠し一信し一思ハ松年頃其の如し信作  
 一其まことし一或書客の玉女とや正真の御妾と  
 一其まことし一何年先一皮客と相一其り夜と  
 一大積と後一頓りに其年と念一其り天女と  
 一折形の切形と納吏とあひたるも或夜内殿の

靡と少一毎と見とておまきとせのふまに容貌の  
羨及心事なりとてその寶冠の輝き浄衣の美潔  
見るとまばゆきはるるを女群の心事も色ハ  
威河とてと極くまゝまきばつたを靡とせとて  
らんく見ゆもせり一に更は天女ハ思ふもまらむと  
昔ハ西放貴死たるとも何か有るぬのうも有るやと  
忽ち懸想と後一とまらりハ色夜羨慕のせりて  
忘るも兼あたるおまきとせまらるるもつとつとハ女の  
心身忘念とて後とる後一燃ハ心事ハハ成る  
元とて誓願のうらむらむらとせかとな伎ハ思召納ま  
多し一新おまきとせのふらとハ天女の神通とて  
我ハ忘想の切らるととて不伎ハ思召行率一夜枕と

かき深き煩惱と救ひ多しと後ハ色夜化事なり  
唯心事との祈願とせり一に天女と誓願の切  
形かと臨心兼のふらふらや或は森屋へおまきとせ  
此一ハ天女と現せるとハん支の如く交情の戯ハ  
思ひもつとて心事もまらるとと後ハ念願の切らると  
兼く今宵願の如く一夜枕とかきとせまらるるも  
心まらに寶帯と解綿衣の裳と掲げ荒雨とて  
夜着の月ハ入るも松人同り少とせ帯とせまらと  
とて其由願の義とて率望ありおまきとせ法乳への  
えらるぬ自ハハ伽羅麝香とてまらり蓬萊の仙女  
上界の天女とて形との義人ハ二人ハ有る後とて  
と魂も奪りて是の源針なり一に國中ハ有る



辨天

二四十三



一雄齋  
圓福





秘んば後りしはさきかきよとて人間の女のやもび  
ちるばさし後思ひしやゆり玉死の母とてりく  
ゆりのふりのひんときるに身おしとたやもくさ  
事とえど死のまゝは人間の身之きざりハハハハ  
しとてあまの麻り登りがく張落秘んばにちり  
けらん事とのぞむ時玉死人とよびとえとていふ  
香湯とまうけく身と洗浴をめく後身を  
みく麻りうへ登るに身おしとて思ひのわく  
のりぬ更り卦事よのほのわく一とてく睡る  
あまもくくさきと及たべ別さる思ひのまごのべ  
らとてるり曉の風面やくり驚うまも入るようら  
とてとて夜よ止まらん事とやめあもく玉死うた

ゆかまのりゆかまのりゆかまのりゆかまのり  
あまもく後會と驚くくく今やまもくせの  
とてゆり行くとあひひる事とえんとてあちり  
とてとて後夢早くさる別さるの波枕のよにか  
事なりとてあまもくあまもくは懸あまもく甲斐  
たのし後す昔とてと驚りてあちりぬ彼西の廣さ  
野ありとて野煙妙花とてゆけとて人なり  
たあもく牧童の一人よはりりらに試りてとて同れが  
かの書物のいさけとてとてとてとて朝霧  
のうらまるとえとていさるぬ天女一人はとて我を  
よびとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて



と云ふ雲の中よりぬかぬ人の赤せし人々も書きて  
與へしよりと云ふと云ふ一と云ふあはれ事と云ふ  
一夜の書と云ふと云ふと云ふと静めまふことのご  
ひと云ふと云ふと云ふと云ふ一試言葉と云ふと云ふ  
田顔の詩と云ふと云ふの中の一句よと云ふ  
天上觀榮雖可樂 人間集散忽足悲  
と云ふありたり人の思ひのむすしと云ふ事古今を  
あはれし事なりと云ふと云ふ人間と云ふのけしと云ふ  
事と云ふ事なりと云ふと云ふ

又日本靈異記 和泉國和泉郡血滄上山寺有吉祥天  
女摸像聖武天皇御世信濃國優婆塞來往於其山寺瞻眺  
之天女像而生愛欲繫心戀之每六時願云如天女容好女

賜我優婆塞夢見婚天女像明日瞻之彼像裾腰不淨汚  
行者視之而慚愧言我願似女何忝天女專自交之媿不語  
他人 中畧 里人聞之往問虛實並瞻彼像淫精染穢優婆塞  
不得隱事而愆具陳語諒委深信之者无感不應也 下畧と  
と云ふ今日の法也佛と云ふ人のまゝ實と云ふ祈誓と云ふ  
ゆゑハむりぬる事と云ふと云ふと云ふのこまて心と云ふ  
ゆゑハ事と云ふ祈願と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
見ると時ハ小野小町の事將りお解がりしと云ふ今の世  
まゝと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
又之河國後養部豊川村ハ云明院と云ふ有と云ふ大の  
堂より毎以天と安と云ふと云ふ靈験新と云ふと云ふと云ふ  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

三明院より二里程東より加茂村と云有は村の馬士  
 何と仰せんかその生は天竺自法の妙者なりと云  
 同相ありと云一の馬士歎はむくのとも子と云毎を能  
 孤の赤形きるも一は者成夜右三明院の道りと通  
 りるには色は片後に見別ぬ顔ひまも此の失人々を  
 居るは馬士にひひるハ口は八回より三明院の  
 毎天也口を故有と云とあり一幸久一の令青竊よ  
 現を出と云汝りまみ也人々もと云と云と云と云と  
 毎一と云と云に汝の生涯と護り豊くは云と云と云  
 去りては幸必人々は皆を毎と云と云と云と云と云  
 と云と云の所産り一命と云と云一具と云と云と云と  
 と云と云と云の所産り一命と云と云一具と云と云と云と  
 と云と云と云の所産り一命と云と云一具と云と云と云と



辨天

二ノ四十八

國土万

一馬よ業毎と曲序西に一かひり音声激よ妙よ  
一々業毎と動一きりありあつりけけけけ  
一とたり御より怪しむるものさうかさいつて二三度  
をせりて後竊り友達よは事と治るゝ速よは死  
一そりての事い加茂村よ一怪よ支束りたるもの  
育一この支束りその一意り余り慮ら業事  
けり一思ひ一ね返回ぬとせむ一と心う一思流  
たさあも一向事と事よ一とさう中ゆの事業も  
支む馬士の名と忘も今思一バ残念のりて治り  
そのよは時おもひ一天女ハ改ハ寶冠と頂よを  
身に綿綿と纏ひるつど藤殿よハあつても天母た  
の女の衣服と着まへり一とこり一ハ妖魅抗程の

教一ハ形さう去れぐ一神佛よと和光回養と云事  
河まバ灯とつひぐ一おけ之明院の女天ハ三像よ  
十八九の女種り見とせあ一と定く作佛よやらん  
吹まの例年正月七日面くんハ國庭あり津衣ととり  
一甘り色一豊年んせれバ法とととと一とととと  
居ハ常一未行ありあ故也との事と元人ハととと  
事ありとたととと事よ一やは活行爲と吹行度  
そのけり右色よ一ハ准あるものよかことの事と  
全同日の漢也  
又武別入間郡富村余西約の地産よと靈験新より  
一々を事とと事よ一は地産よの事ととと倍の  
夜よハ地産ととと事よ一予は事ととと村ハ長

まふそのよ安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
此度ゆを言ふ疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
女よん疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
よん疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
可くもまふに疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
言てまふに疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
灯もまふに疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
或人い書と因く津浦に云天女の口容貌余り羨慕  
よまふに疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
夢りまふに疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ

如何成老翁野史とは疾と續ばんと病うまふるハあま  
病うに思ふまふに疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
夫よ安んずるに疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
存念のり疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
虚實の量り疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
神佛の靈験ハ疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
咄と撰ひ疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
余り病癒り疾をいとはりて安んずるに疾をいとはりて故くもまふ  
の難是院の道源河内宗日光山龍尾権現の靈院

記と具り記さる。後記中、権現と親相の  
もとの事、其文、云、忽然更見、大杉横伏、其上直立、  
其容顔、極高貴、尊嚴、年齒十有七八、計無緑髮、於背後、著白衫、赤袴、身向北、面予、予、是、と、以、見、る、時、ハ、権現の言、貴り  
〜と、去、り、と、美、黛、あり、一、事、ハ、前、の、天女、今、目、振、り  
四、事、と、思、り、ら、う、根、の、神、の、凡、丈、の、概、歎、と、洩、らん、と、  
亦、毎、々、入、秘、め、ら、る、事、ハ、根、人、同、ハ、ま、ま、り、き、ま、り、て  
何、秘、書、解、と、と、文、箋、の、及、ぶ、事、ハ、あ、ら、う、と、か、う、を  
強、く、實、と、さ、ら、ふ、ハ、何、と、ぞ、理、也、虚、実、之、見、る、人、の  
心、り、ま、り、と、さ、ら、の、と、去、あ、ら、う、世、系、ハ、瀛、彝、の、壯、男、に  
瀛、念、を、具、と、さ、む、と、書、於、ハ、せ、ら、あ、ら、う、で、戒  
然、ん、と、記、せ、ら、の、之、見、誤、り、あ、ら、う、と、ぞ、

予思、入、り、以、来、に、之、明、院、の、每、妙、天、と、云、ハ、恐、ハ  
每、妙、天、ハ、妙、也、〜、樂、音、天、の、り、〜、樂、音、天、と、  
妙、善、天、と、云、〜、一、切、の、善、声、の、事、と、好、〜、天、女、之  
の、中、西、之、死、と、西、秋、と、西、謂、音、祥、天、女、の、事、也、  
故、り、既、芭、と、存、ら、う、事、何、と、好、〜、馬、士、の、音、声、り、惣  
の、ハ、お、現、ら、う、〜、あ、ら、う、故、〜、又、夫、妙、天、ハ、障、碍、と、排、  
あ、ら、天、女、の、名、号、と、持、ま、り、〜、秋、實、と、と、日、り、あ、ら、う、  
存、已、之、記、也、〜、列、女、の、物、を、秋、氏、と、西、謂、音、  
天、と、云、ハ、金、光、明、燈、の、現、れ、〜、幻、音、祥、天、同、一、神、也、  
云、り、是、ハ、淨、教、傳、作、の、每、天、秘、決、り、瀛、滄、洞、奥、り  
〜、我、亦、め、と、法、智、と、〜、希、ハ、海、と、る、事、能、ハ  
〜、か、婆、ら、う、と、と、實、ハ、二、神、と、世、に、云、七、秘、神、と、

川の中七星のま形也天の四七の林地の四九の林  
 田一物め〜海多々〜物〜とよ所よ海よ  
 幸よ〜河〜色バ異〜妻友ハ海せも竹よとせよ  
 音声と慕ひ〜出現〜髪りもよと基の音事  
 けり

藤束〜髪への毛の生〜事

藤尾張の國春日井郡水野村の庄屋方よ焚抄りの  
 薪の肉のふ榊骨木に似〜ふ細〜木り  
 枝と能居〜ふふぬり 昔さ女の髪への毛の根ありその昔  
 生〜と〜と風〜見え〜餘り物友物〜〜回所  
 只代官陣屋へ派出〜り連大藤行某さふ人 衣古屋（指か  
 づふと見え〜に當の〜〜成程今〜長〜髪への毛而に

神田行某より長裁たる髪



生々有如何なるものか評改付の本草切者成る  
 のと居合せしと唯好愛と斗りしつゝとて夫  
 知り難く舊友神田行某彼處と文よとて先下  
 ぬは水野の邑ハもて山中の宋薪採所と  
 少く前死ふ故行をよとて伐束りしと也分り兼ふ  
 どの事也是ハ文政八年己の年たり記一並て吳夢  
 備ふ

又巻別是所ハ西南一里程隔ふ所なり大西村徳性寺  
 と云寺有 同國半地所坊 右寺の表の方の庭前より終斗  
 の築山有は西の諸本は幹葉よ小枝よと細と總の  
 如く白苔の長さ七八寸と有る今一白髪の外より  
 小枝おどハ葉のどくく一方ハ見事よ下と居

たると多く又生無りおどと有同ド地徒とていふも  
 垣一重隔ふ隣家の雑木よハ更りしや右寺中り  
 とも葉所解ども生居る本よハ少とてなうと  
 諸本と云ハ紅葉漸濁松栂つゝおど又くおまご  
 つまの本よと生居るり今一地氣の極く一むか  
 とらわらう杯後幸ゆ念心と

南見東あり並一なり  
 亦文と先似よりきふ  
 事とて名古屋鶴重河  
 真慶寺の老僧のお修り  
 なり是とてい見ふ時と  
 う根の類ハ徒分諸國よ有る



神傳の靈験を聞まはし

神傳の靈験を聞まはし 車に載せし 怪家の

事

江戸芝田の八幡宮を田町七丁目一在る近邊の

去産神の社傳り云奈神の

應神天皇御長一尺一寸五分弘法大師の作

仲哀天皇御長一尺一寸五分傳教大師の作

神切皇辰御長一尺四寸五分同他無よ 天見屋根命

武内宿禰の五度りして人皇四十二代

元明天皇の御宇は地り法隆寺にありて須賀の物願

の大神にありて常使の御宇にありて社地あり

延喜式月の藤田の神社ありてあり元禄年中奈乳

の長久保の邊のり者の子にありて奈乳の外車に載せ

しとて怪家の社にありて靈験の事と繪馬

とありて八幡の社にありて在る近頃の堂内にも

見ゆるなりて此物成りて別處ありて多

量院にありて怒り母の素のりて其繪馬は古く成り

換せし故社を並りての事故とて其事とて有り

編寫しに載せし繪馬ありて有七丁目と八丁目

の七丁目の事ありて則八幡の社ありて町内ありて九丁目

も場に出る所の町也今に始の事ありて其

神傳の靈験ハ人智の及ぶ事なりて其作を思ひ

事也は繪馬今に廢後し神傳の法入(傳りて)

とて終りて同而九丁目に行る後河原平兵衛





云者、活り、に日人驚く、忽修復を加へ、今ハ又  
 相殿、揚々、數百年に傳つる、其の、はありぬ、其の  
 神使の靈妙、忍入る事、は神の靈験の事  
 又、是、同法、と、徳園、武村、那、芝山、観音寺、ハ、性古ハ  
 名、別、の、佛、用、今、と、元、人、志、の、事、も、靈、場、の、  
 中、も、觀、世、音、菩薩、英、二、王、の、ハ、靈、験、新、の、事、世、に  
 勝、色、強、い、是、又、元、人、の、能、知、而、り、は、寺、に、三、層、の、階、成  
 成、立、と、か、美の春の事あり、遠近  
 の、男、女、競、秋本と豊集むは時終中大杖を伐出  
 救、人、儀、の、如、く、に、因、縁、畏、聲、と、出、り、來、り  
 寺、り、元、來、は、本、ハ、天、物、の、惜、と、も、申、來、の、有、り、其、の  
 天、物、取、立、怪、や、は、車、俄、り、群、集、の、中、を

池、出、止、ま、り、ど、人、驚、く、、迎、除、を、も、と、も、同、因、  
 高、田、と、云、下、の、金、兵、清、又、子、小、池、の、、衣、履、の、母、中、澤、村、の  
 茂、助、次、と、云、その、初、合、日、人、と、偏、と、車、ま、と、と、、割、  
 寺、り、日、人、を、身、神、悉、く、粉、の、、成、づ、と、よ、不、思、夜、や  
 衣、履、の、所、、破、裂、、と、身、ハ、何、と、も、怪、事、と  
 何、く、少、の、痛、を、何、と、も、恙、無、り、と、、也、金、兵、清、や  
 茂、助、次、も、博、多、宿、の、帯、と、、居、り、に、、帯、ハ  
 引、き、ま、り、り、と、の、事、と、追、、誰、り、、怪、り、、事、り  
 是、ハ、江、戶、赤、坂、中、通、り、の、質、を、與、兵、清、と、云、者、の、近、づ、の  
 生、色、の、事、の、、其、時、の、形、勢、、と、、あり、居、、活、り、し、と  
 前、の、八、幡、宮、の、靈、験、と、今、、同、板、、思、ハ、能、、九、  
 一、あり、は、事、の、寺、の、畧、録、記、り、と、記、、何、と、も

今が一車斎の松り思入故具り記一並ぬ且  
 縁起より二王尊の擁護もやと河邊も平の観音  
 の妙智カとけは事うと思入なり  
秘傳又前之は回作の観音  
二十三年月一及び岡鹿者なり  
 志も二王尊の懐疑奇  
 吳形ふ靈験との事少うも  
 は二王尊の靈験の事と記一並八の巻去宰府の元  
 梅不思液と形も条の事と記一  
 並よりたも色バ二王尊の擁護も何りとも  
 現妙感もか中へ何りとも事也

想山著聞奇集巻の式 終

想山著聞奇集  
 後文庫

